

エッチャンの思い出

「私を抱いて部屋まで連れて来てくれないか」そういうとエッチャンは私の胸に倒れ込んできた。夢街道 90 km、来年で 10 回目となる様々な事があった。大変なことも楽しいことも。2012 年 6 月第二回目のゴール後、神楽の湯横のかぐら山荘での出来事だった。参加人数 20 名、遠山郷での宿泊 5 名、参加の人が無事に遠山郷にゴールして、日帰りで帰る人を見送って、一人畳の部屋で横になっているときだった、エッチャンは私に話したいことがあると。話し出した。「あの人は困る」と「私は遠山郷まで走りに来たのだ、車に乗りに来たのではない」と切ない気持ちを私に訴えてきたのだった。走ることを趣味とする一人として私は、エッチャンの気持ちはわかる、しかし、その人の気持ちも、わかる。なんて答えたのか忘れたが、そんなことがあったことだけは覚えている。そんな時、携帯が鳴った。菊〇さんからだ。何だろう。菊〇さんの声がした「大〇さんが倒れた、救急車を呼んでいる」ビックリした、如何したのか私の頭は混乱した。保険はかけている、その保険をかけているモータースに電話してみた、そしたらその人は「傷害保険だからそのような事にはお金は出ない」そんな話だった。大〇さんの家に電話した、大〇さんの奥さんであろうか、女の人の声だった。救急車で運ばれたことを伝えた、奥さんが言った「遠山郷は何処ですか？主人は何処行くとも言わないで困っているのです」云々・等々。。

菊〇さんの適切な判断で救急車を呼び、その救急車で阿南病院まで付き添ってくれたのだった。

自分は民宿の部屋で一人「これからどうなるのかな～」と考えていた。夕方になり夕食が始まり、その前にビールを飲んだ。明らかに自分は暗かった。様々な走った仲間の雑談を聞いていたのだが上の空だった。そんなとき、エッチャンは私に向かって倒れてきた。酔いつぶれたエッチャンを、私と香〇さん鏝〇さんと宿の女将さんとで部屋まで連れて行ったのだった。私はウルトラの世界に入って二年目、何も知らないウルトラの世界、エッチャンは萩往還を毎年参加しているそうだ、ウルトラの世界では知る人ぞ知るランナーだそうだ。あとからヒロボーさんに聞いた話だと、彼女は極端にアルコールには弱いから気を付けて、との話だった。エッチャンは、何時もは飲まないけど、そのときは気分がよかったからつい飲んだ、といていた。

菊〇さんが帰ってきて、大〇さんの状態を聞いて、大〇さんの奥さんに連絡しないといけないと私が言ったら菊〇さんが話してくれた。「大丈夫だよタダの貧血だよ、点滴すれば明日にはケロツとしている」そう聞いて少し安心した。次の日の朝、他の人はバスで平岡駅に、私は軽トラで阿南病院に行った。大〇さんは元気だった。菊〇さんの言っていた通りだった。「これから歩いて水窪まで行こう」なんて言っていた。懲りない人だった。夢街道の幟、案内板などを大〇さんと一緒に片付け、大〇さんを磐田まで送ることにした。大〇さんから昼ごはんをご馳走してもらった。大野さんの車は磐田の駅近くに止めたあるそう。そこまで送って別れようとするとき、大野さんは聞いてきた「これからどうするの？」と。「せっかく着たのでららぼ一とに寄っていく」と答えると、大〇さんも一緒に行くという。ららぼ一との地下駐車場に車を止めると、大〇さんも向かいの駐車スペースに車を止めた、そのときピロリロリン・ピロリロリン、私の携帯が鳴った、携帯を見ると画面には大〇奥さんと出ているビックリ忘れていた。その携帯を大〇さんの所に持っていく「大〇さん早く帰った方がイイ」と私は言った。

数年前の余呉湖ウルトラでも人が倒れたことがある。私たちの目の前で、私とヒロボーさんと横目で見て通り過ぎるとき、その人はイビキをかいて眠っていた。南部さんが走る、佐〇さんが心臓マッサージをしている。ヒロボーさんがゼロ富士のことを心配していた。救急車がやってきて、その人を搬送して行った。

大会が終わり、後夜祭、二次会とあった。佐〇さんに聞いて見たら「途中息を吹き返したが、また・・・。」と「ダメかもしれない」とも話していた。

人は何時か死という日が必ず来る。それは誰も何時の日かわからない。残されたものに負担をかけてはならない。自分も夢街道をやっている、自分のときもそのような事があるかもしれない。しかし、家族には迷惑をかけてはいけない、そう思う。次の日曜日、明神山に登ることにした豊橋から来たグループと一緒に、そのとき佳江さんが私に耳打ちした「あの人、息を吹き返した」と、私はホットした。胸をなでおろした。

「諸行無常」限りある人生、おかげさまの心で余呉湖ウルトラ走りたいと思います。

信心